

# 忘れられた日系人

—民俗学のフィールドとしてのブラジル日系社会—

根川 幸男 \*

NEGAWA Sachio

## The Forgotten Nikkei

Brazilian Nikkei Society as a Field of Folklore Studies

Japanese emigration overseas is an important part of the modern history of Japan. As it intersected and mixed with various cultures, the Japanese/Nikkei culture of Brazil recreated itself repeatedly, and became recognized also as an element which constitutes Brazilian culture. In this paper, we review Japanese immigration and Nikkei society in both Japanese folklore studies and Brazilian folklore studies. We also survey the latest tendencies and latest results of folklore studies dealing with the movement and recreation of “matsuri/events,” which is one of the areas of interest of the author. After this review, we will consider the potential of folklore studies for investigation and research on Brazilian Nikkei society, introducing the Japanese ethnic event of the Oriental Town in São Paulo, and the old and new Bon festival dances of Londrina in Paraná as examples.

キーワード：移民 日本民俗学 ブラジル民俗学 マツリ/イベント ブラジル日系社会

## 1. はじめに

ヒトの移動というのは、すぐれて人間的営為である。民俗学は移動・漂泊する人びともあたたかい視線を注いできた。宮本常一は、日本民俗学の記念碑的作品『忘れられた日本人』[1960]の中で、盲目の博労、飯貰い、世間師など移動する人びとが語る生活史に光を当てた。日本人の集団的・継続的な海外移住は、技術の発達やグローバル化を背景とした近代的営為であり、日本の近現代史を構成する重要な一部でありながら、日本民俗学においては、長らく周縁的な存在に追いやられてきた。

民俗学における「民俗」については、さまざまな説明がなされているが、ごくふつうの人びと(常

---

\* ブラジリア大学外国語・翻訳学部

民)の中で日常的にくりかえし行われる生活文化、すなわち慣習・信仰・祭祀・年中行事・心意・口碑・技術・民具・社会組織などの「民間伝承」であると理解できるであろう。そして、民俗の特徴がその伝承性・伝播性にあるとするなら、たとえば日本人の移動にともなって、日本人の民俗が海外へ伝承・伝播していくのはごく自然に了解しうることであろう。

本稿では、日本民俗学とブラジル民俗学両者における日本移民・日系社会との関係性（あるいは無関係性）を概観し、筆者の関心領域の一つである「マツリ／イベント」の移動や再創<sup>(1)</sup>にかかわる民俗学の最近の傾向や成果を参観する。その上で、サンパウロ東洋街<sup>(2)</sup>の日系エスニックイベント、ロンドリーナの新旧盆踊りを事例として紹介しながら、民俗学のブラジル日系社会を対象とする調査・研究の可能性について展望したい。

## 2. 日本民俗学と海外移民

日本民俗学の生みの親である柳田国男は、「移民の移民論」[1925]や『明治大正史世相篇』[1931]などで移民論を展開している。ただ、これらは日本人の海外移民についての、いわゆる移民問題を論じたもので、移民を対象とした民俗研究ではない。柳田の移民論は、「移民の出稼ぎ気分や国際的知識の不足」「安易なる国策移民」への批判を柱とし、移民教育の徹底による問題の回避をねらいとしたものであるとされる[宮田 1986a: 379-383]。柳田の視線は、海外に渡った民俗文化そのものより、残された家や故郷との絆に向けられている。その後も民俗学の研究対象として、移民や日系社会は長らく射程の外に追いやられていた。こうした対象に民俗学的関心が向けられるようになったのは、1980年代になってからである[森 2000: 169]。

80年代からの変化として注目されるのは、宮田登が「移民」「日系社会」をテーマに、「日系文化」「日系民俗文化」[宮田 1986a: 401-411]という概念を導入しながら、精力的に論考を発表している点である。宮田[1986a]は、「たまたま日本の一つのムラで常民として存在していた人が、ある時点から海外移民になったということは、その人の個人史が累積されてくるなら、たとえば日系文化としての文化主体が成立するかもしれないと考えられる。当然、日本の民俗文化の延長上に、日系文化において、同列に論じることも可能になっているのかもしれない」[379]とし、日系移民の文化を民俗学の対象とする可能性について論じている。実際、カナダのバンクーバー、トロント周辺の日系移民の文化を、県人会の活動や俳句にみる生活感覚、盆踊りや敬老会など仏教会・日系文化会館の活動、日系エスニックイベントとしてのパウエル祭などを通して、独自の「日系人文化」が形成されつつあることを指摘している[宮田 1989]。また、環境民俗学の旗手とされる鳥越皓之も、80年代にハワイ日系移民に関わる著作を発表している。『沖繩ハワイ移民一世の記録』[1988]は、ハワイ移民一世のライフヒストリーを聞き書きし再構成したものであった。

こうした変化を受けて、森[2000]は、「すぐれて「近代」的現象である日本人の海外移住は、「常民」としての日本人が海外に渡航、そこで異質な文化や民族・人種との日常的で持続的な相互作用を行ってきた希有な「日本人」の事例として、その体験は日本の「近代」という時代の一つの側面として民俗学の研究対象であるとともに、「日本人」「日本（民俗）文化」を考察する上でも重要な課題となりうる」[168]ことを指摘している。

『日本民俗大辞典』上[1999]・下[2000]には、「移民」[上, 131-132]や「日系社会」[下, 278-279]の項目があり、いずれも1頁近くがさかれている。また、『日本の祭り文化事典』[2006]

では、芳賀日出男がサラダボールをモデルとしたアメリカの多文化主義的傾向をあげて、「日系人が日本の祭りに親しみを感じるのはごく自然なことであろう」[44]と想像をめぐらせている。これらのことから、最近の傾向として、海外移民や日系社会が一応民俗学の研究テーマとしてとらえられていることが理解される。ただ残念なことに、今のところ、ブラジル日系社会を対象とした民俗学側からのめだつた調査や研究を見ることはできない。

### 3. ブラジル民俗学と日系移民

日本の約23倍の広さを持つブラジルは、19世紀以来、ヨーロッパやアジアの国・地域からおよそ500万人を超える移民を受け入れてきた。これらの移民が異なった文化を持ち込み、それぞれの集団の内外で彼等の文化の伝承を行ってきた点において、ブラジルは民俗文化の宝庫といえる。

しかしながら、今日のブラジルでは、「民俗」(Folclore)「民俗学」(Estudos Folclóricos)という言葉があり、いくつかの博物館にその名を残すもの<sup>(3)</sup>、個々の大学・高等教育機関では、その名を冠した専攻・講座はほとんど存在しないといってよい。歴史学や社会学、人類学の講座で、「ブラジル文化」「ブラジル社会」「ブラジル民衆文化研究」などの科目において、ときどき言及されることはあるが、民俗学がブラジルのアカデミズムの周縁部に位置しているのは疑いない。

ブラジルの民俗研究は組織性や体系性をとることなく、コート・デ・マガリャンエス、バルボーザ・ロドリゲス、メロ・モラエス・フィーリョ、ペレラ・ダ・コスタ、シルヴィオ・ロメロ、アマデウ・アマラルといったいく人かの知識人たちの個人的な研究として始まった[BENJAMIN 1992: 39]。1885年には、ブラジル民俗研究の記念碑的著作となるシルヴィオ・ロメロの『ブラジルの民話』(Contos Populares do Brasil)が発行されている[ROMERO 1954]。また、1919年には、ジョアン・リベイロによる「第1回民俗講座」(Curso de Folclore)が開かれている[BENJAMIN 1992: 39]が、その後継続したかどうかは不明である。

1922年には、サンパウロで「近代芸術週間」が開かれ、ブラジルにおけるヨーロッパ文化偏重への批判が展開され、移民を含めた「ブラジル文化」「ブラジル芸術」の見直し、あるいは新たな創造への機運が高まるが、当時サンパウロ州農村部に居住していた日系移民はその射程には入っていない。1930年代には、ブラジル近代主義の代表的作家で「近代芸術週間」の中心人物でもあったマリオ・デ・アンドラーデが、サンパウロ市文化局の局長として迎えられた。彼はそのスタッフとともに、当時最新の録画・録音機材を投入して、北部や北東部の民俗音楽に関する調査を行っている[TONI 発行年不詳: 6-9]が、お膝元であるサンパウロ州の日系移民について調査した形跡が見当たらない<sup>(4)</sup>。その後の第2次世界大戦中、1942年にブラジルが連合国側に立って参戦したため、日本人をはじめドイツ人・イタリア人は「敵性外国人」となってしまう、研究対象どころか、官憲による監視の対象となった。

第二次世界大戦後の1947年に、ユネスコの助言により、レナート・アルメイダらによってブラジル民俗協会(Comissão Nacional do Folclore)が設立され、機関誌Boletim da Comissão Nacional de Folcloreが発行されるようになる。1951年には、第1回ブラジル民俗学会(1 Congresso Brasileiro de Folclore)がリオ・デ・ジャネイロで開催された。また、1947年から1964年まで、「民俗運動」(Movimento Folclórico)と呼ばれる一連のブラジル民俗(特に、先住

民やアフリカ系住民の文化)にかかわる運動が、芸術家や文学者を中心に起こっている [ABLEU: online]。さらに、1969年には、カマラ・カスクードの『ブラジル民俗事典』(Dicionário do Folclore Brasileiro)が発行されている。

一方、1950年代からは、米国や日本の研究者、ブラジル人研究者（主に社会学者や文化人類学者）、そして日系人自身による日系人調査がはじまる。1954年には、泉靖一を団長とする学術調査団が来訪し、サンパウロ大学の斉藤広志、宮崎信江らの協力で調査を行った。また、移民50周年を記念して、1958年からは日系社会の悉皆調査である「コロニア実態調査」がはじまり、1964年に『ブラジルの日本移民』資料編・記述篇（東大出版会）として結実している。1960年代には、米国・ブラジル合同の日系集団の同化と文化変容の調査が行われるなど [前山 2003: 315-317]、日系人・日系社会に対する関心が高まった。また、1965年に設立されたサンパウロ人文科学研究所を中心に、今日まで日系研究者による一連の日系社会に関する調査・研究が行われている。さらに、80年後半代から台頭した多文化主義政策によって、先住民や移民の文化を「ブラジル国民文化」を構成する重要な要素としてとらえる視座からの研究もさかんである。

しかしながら、以上のような研究は、いずれもブラジル民俗学の外部で行われており、日系移民や日系社会がその研究対象となった痕跡は見出せない。それだけでなく、ブラジルでは、「民俗研究」と名うった研究そのものが、「学」としての組織性や体系性を取ることなく、多文化主義の言説が発展する前に解体してしまった感がある。

#### 4. マツリ／イベントの民俗学

日本民俗学における祭礼研究は、柳田国男『日本の祭』[1942]を嚆矢とし、主に信仰や祭祀を基盤として持続性や集団性を重視する傾向のもとに発展してきた。しかし、近年、民俗学の中からも、神や信仰を介在しない祭りである「マツリ」あるいは「イベント」<sup>5)</sup>が、国家や行政の施策との関連で論じられたり、移動や観光といった文脈から分析される傾向が現れている。また、祭礼の現代的バリエーションについて着目する必要性や、祭礼からマツリへと変化していく中で新たな価値や意味が生じていく諸相が「生成の語り」といった視点から論じられるようになってきた [中野 2003: 7-8]。

戦後日本の急速な都市化は「民俗」そのものの変質をもたらしたが、祭りの祭礼化、祭礼のイベント化と都市化は不可分なものであった。たとえば、茂木 [1989] は、民俗学が研究対象とする都市の祭りとして「都市域において行われている社寺の伝統的な祭り」とともに、自治体、観光協会、商工会議所などによって運営される都市の名を冠した祭り、博覧会、フェスティバル、カーニバルなど「都市域において行われている非伝統的な祭り」(イベントマツリ)をあげ [138]、その代表例として「浜松まつり」について考察している。また、内田 [1999] は「伝承」を「変化することが状態」と解釈することを提言し、都市化された生活のあらゆる場面を研究の射程に入れる必要性を主張している [34]。さらに、高知よさこい祭りが地縁や社縁ではなく、選択縁によって結びついたクラブチームによって維持されている実態をあげ、伝承母体のあいまいさとゆるやかなネットワークがイベントを維持し活性化させることを指摘、このような対象を民俗学が見逃してよいはずはないと主張している [同: 37-39]。

こういった一連の「祭礼」研究から「マツリ／イベント」研究への流れの中で、注目されるのが、

移動や再創にかかわる研究である。阿南・内田・才津・矢島[2000]は、青森県から秋田県にかけて分布するねぶたと高知県に起源するよさこいの全国的な移動・展開を「旅」と表現し、定着しない一回性の移動を「遠征」、定着にいたる「移植・模倣」と分類している。中野[2006]は、移動するイベントとして、ねぶたやよさこいに加え、阿波踊り、小倉祇園太鼓をあげ、行事内での場の移動とそれにとまなう神事の形骸化や行事自体の意味の変化について論じている[233-234]。福岡[2004]は、北海道芦別市が「電承<sup>6)</sup>」によって、福岡の博多山笠をそっくり模倣する過程を詳細に記述するなど、「ハカタウツシ」と呼ばれる博多山笠の移植・模倣と全国展開について記述し考察している。これらの論考は、民俗学の分野でも、マツリ／イベントの移動や模倣、複製、再創に対する関心が高まっていることを示している。特に、阿南[2008]は、ロサンゼルス二世ウイークにおける青森ねぶたの遠征について現地調査し、日本の民俗の海外越境に関する詳細な論考を発表している。阿南はまた、マツリ／イベントの特徴として「節度ある非日常」をあげ、逸脱や暴力性の排除、予定調和のうちに終わらせようとする傾向にあることを指摘している[阿南2003:275]。

こうした、日本国内のマツリ／イベントを対象とし、それらの海外への越境もふくむ移動や模倣、複製、再創に注目する視点・研究方法は、ブラジル日系社会におけるマツリ／イベントという対象にも応用可能であろう。民俗学は、ブラジルの日系文化を対象とし、分析するさまざまな概念や枠組みを提供するものと期待されるのである。

## 5. 民俗学のフィールドとしてのブラジル日系社会

海外最大の日系人口を持つブラジルは、民俗学にとって、多くの素材と可能性を提供すると考えられる。現在、1億8000万人あまりの人口の中で、日系人口は約150万人。総人口の1%にも満たないマイノリティでありながら、その文化的なプレゼンスはけっして小さくはない。ご多分にもれず、マンガ、アニメ、J-POPといったサブカルチャーは若者を中心に熱狂的に受け入れられているが、他の国々との違いは、ブラジルが戦前から日本人移民を受け入れ、その日系コミュニティが自文化継承に力を注いできたという強固なベースがあることだろう。

ブラジル日系文化(エスニック日系文化)に関する近年の研究では、日本の音楽・芸能については細川[1995]や小嶋[1999]<sup>7)</sup>、食文化の移植・普及については森[1995]が先鞭をつけ、最近ブラジル南東部でさかんなYOSAKI SORANについては渡会[2006]、同[2008]の研究がある。これらの意欲的な研究が見られるものの、ブラジル日系社会の規模やその文化の豊穡さを考えると、これからの開拓がまたれる。約7万人に減少した一世世代のライフストーリーも、重要な民俗資料たりうると考えられる。

宮田[1986a]は、ホノルルの「移民追悼の盆踊り」を紹介し、「日系移民文化」においては、初詣でと盆踊りが儀礼の上で甲乙つけがたい。精霊崇拝の心情は、日本人には豊かに残された民族性の一つといえるだろう」としている。ブラジルでは現在、初詣行事が見られないのに対して、盆踊りは各地の日系コミュニティで踊られている。ただ、それらは、「精霊崇拝の心情」とは切り離され、イベントの中に組み込まれ、アトラクションや娯楽としての性格を増幅させている。ここでは、そういった盆踊りを中核とするイベントとして、サンパウロ市のアジア系エスニックタウン東洋街で開催される「東洋祭り」とパラナ州ロンドリーナ市の「ロンドリーナ祭り」を事

例として紹介し、民俗学のブラジル日系社会を対象とする調査・研究の可能性について展望したい。

### 5-1. サンパウロの東洋祭り

東洋街では現在、花祭り・七夕祭り・東洋祭り・餅つき大会という4つの日系エスニックイベント<sup>(8)</sup>が開催されている。東洋街とこれらのイベント形成については、根川[1998]、同[2006]、七夕祭りの再創・拡散については根川[2008]で考察したので、ここでは詳述を避けるが、それぞれのイベントの概略は次の表1の通りである。

東洋祭りは、日本各地の民俗芸能のエッセンスである。4つのイベント中もっとも古く、2008年で40回目を迎えた。この東洋祭りは、東洋街の原型となるリベルダーデ地区の日系商店街活性化のため、リベルダーデ商工会（Associação Cultural e Assistencial da Liberdade、以下ACALと略）<sup>(11)</sup>の前身であるリベルダーデ日系商店親睦会によって、1969年に「第一回東洋祭り盆踊り大会」として始められた。盆踊りといっても、この時点ですでに、商店街活性化のためのイベン

表1 東洋街の日系エスニックイベント

行事	花祭り	七夕祭り	東洋祭り	餅つき大会
ポルトガル語名称	Festa das Flores	Festa das Estrelas	Festa Oriental	Festa de Socadura de Arroz
主催	ブラジル仏教連合会	ブラジル宮城県人会 <sup>(9)</sup>	ACAL	ACAL
後援・協賛	釈尊讃仰会、ACAL、サンパウロ市 etc.	ACAL、仙台市、宮城県、サンパウロ市、サンパウロ州、ラジオ・ニッケイ etc.	サンパウロ市、ラジオ・ニッケイ etc.	サンパウロ市 etc.
時期	4月8日に近い週	7月7日に近い週末	ほぼ12月最初の週末	12月31日
開始年	1958（→1976） <sup>(10)</sup>	1979	1969	1976
開催場所	リベルダーデ広場、ガルヴオン・ブエノ通り	リベルダーデ広場、ガルヴオン・ブエノ通り、エストウダンテス通り、グロリア通り	リベルダーデ広場、ガルヴオン・ブエノ通り	リベルダーデ広場
主な行事・だし物	甘茶供養、仏教婦人会によるコーラス、お練供養（パレード）、経読 etc.	神事供養、七夕飾りコンテスト、短冊販売、ミス七夕コンテスト、郷土芸能、歌謡ショー、武道デモストレーション etc.	お神輿・郷土芸能パレード、東洋美術デモストレーション、ミس着物コンテスト、歌謡ショー etc.	神事供養、餅つき、餅・お雑煮配布、仏式供養、茅の輪くぐり、万歳三唱 etc.
パレードの有無	○	○	○	—
街頭装飾・装置	甘茶供養特設舞台、白象の神輿、仏像、幟、横断幕 etc.	七夕飾り、郷土芸能・歌謡ショー特設舞台、幟、横断幕 etc.	郷土芸能・歌謡ショー特設舞台、幟、横断幕 etc.	餅つき用白と杵、幟、横断幕 etc.
観客動員数	約1万5000人	約10～15万人	約8万人	約1万人

（出所）ACAL、ブラジル宮城県人会、ブラジル仏教連合会から提供された資料、関係者へのインタビューをもとに筆者作成

トとして組織され、アトラクションや娯楽としての性格を有していた。ただ、ブラジルのメディアでは、たとえば、「東洋祭りはその年に得た幸運に感謝し、来る年の福を願う伝統的なお祭りで、日本人の間でもっとも重要な文化的主張である」(Jornal da Tarde, 2001年12月9日、傍点筆者)と紹介され、ここではこのイベントが日本の「伝統」であると了解されている。「東洋祭り」と名付けられたのは、リベルダーデ地区における当時の中国系・韓国系の進出を反映してのことであるという。

筆者は、これらの日系エスニックイベントを「創られた伝統」であり、主に以下の3つの要因が相互作用することによって創出されたことを指摘した[根川 2006: 136-137]。

- 1) 日系住民のブラジル定住化と都市化にともなう「新しい家郷」建設の希求
- 2) リベルダーデ地区の日系商工業団体のビジネス振興策
- 3) サンパウロ市の「マルチエスニック都市」としてのイメージおよび観光・文化資源創出の戦略

中でも、東洋祭り創出の要因としては、2)の要因がもっとも大きかったといえる。当時は、地下鉄南北線の架設工事が進行しており、さらに1967年10月になると、高速道路東西線建設のため、ガルヴォン・ブエノ通りが真ん中で分断され、日系商店街の草分けである映画館シネ・ニテロイをはじめ、取り壊しや移転する商店が増え、日本人街が騒然となる事態がもちあがった。

こうした危機的状況の中、商店親睦会幹部からの必死の働きかけがあって、1969年6月に市観光局が同エリアを「リトル東京」とする構想を採用した。これは、街路や店舗を日本的なシンボルで装飾し、ロサンゼルスのリトル・トーキョーのような日系エスニックタウンを建設する構想であった。この「リトル東京構想」は、いつの間にか「ゾーナ・オリエンタル(東洋街)計画」と名を変えるが、増加する韓国系・中国系商人や住民を排除せずとりこんでいく戦略が採られた。1973～74年には、サンパウロ市とACALによって、東洋街の街頭装飾、大鳥居やスズラン灯、巴模様のタイルなどが設置された。東洋祭り開催と合わせて、このエリアは、1973年末の市の地区対抗街灯装飾コンクールで優勝している。「世界最大の日本人街」と称されるサンパウロ東洋街のオープンは、1974年11月である。これはエリアの中心となる地下鉄リベルダーデ駅開設に先立ち、東洋街の第1期工事が完了した直後にあたる[ACAL 1996: 20]。

盆踊りは、日系住民ならばだれもが親しみをもつ民俗行事であり、非日系住民にとってはエキゾチックな東洋の「伝統的ダンス」である。東洋祭りは、この盆踊りを中核に、徳島の阿波踊り、山形の花傘音頭、岩手のさんざ踊り、鳥取のしゃんしゃん笠踊りといった日本各地の民俗芸能を導入し、年によっては韓国系の伝統舞踊、中国系の獅子舞やカンフーなどアジア系の芸能・武術を招聘しつつ発展してきた。東洋街形成の過程で、1976年からはじまる餅つき大会や1979年に開始された七夕祭りとともに、都市イベントとして洗練され、観光・文化資源として機能することが期待されてきた。

現在、東洋祭りは、ACAL主催、サンパウロ市の協賛で、毎年ほぼ12月最初の週末に催される。他の3つのイベントと同じように、サンパウロ市の公認行事となっている。祭りに先立って、ガルヴォン・ブエノ通りでは、南米大神宮による成功祈願祭の神事が執り行なわれており、ACALの日系役員や日系議員にまじって、非日系議員や市の代表者が祈願祭に参列する。イベン

トの拡大にともなう「伝統」的權威の付与やホスト社会への接近ともいえる<sup>(12)</sup>。

祈願祭の後、リベルダーデ広場で開会式が行われ、同広場とガルヴォン・ブエノ通りを中心に、先述した日本各地の民俗芸能に加えて、大小神輿の練り歩き、和太鼓演奏、琉球国祭り太鼓、YOSAKOI SORAN など新しい芸能やラジオ体操、健康体操なども披露されるようになっている。また、広場の特設舞台では、日系ラジオ局「ラジオ・ニッケイ」の協力によって、空手や拳法などの武道から演歌、ロック、ストリートダンスなどポップ音楽のパフォーマンスも行われる。つまり、日系の民俗芸能を中心とし、一方では成功祈願祭という神事を加味し、他方ではエンターテインメントとしての面も見せている。また、他の3つのイベント同様、非日系の人びとを含む多くの観客を集め、市長や市議、州議、連邦議員などが来賓として出席するため、政治的パフォーマンスとしての性格も見せている。

中野 [2006] は、日本の阿波踊りやよさこい、小倉祇園太鼓などのイベントを「身体性」と「絆」という観点から分析しており、「イベントへの参加不参加は任意でありながら、社会的に拘束された型をパフォーマンスとして習得するという身体を介した経験が、ひとびとをカミなきマツリに緩やかに結びつける契機となっている」[236]と指摘している。東洋祭りで行われる演目の中でも、ひまわり太鼓グループによる和太鼓演奏や ACAL 青年部による YOSAKOI SORAN などは、地縁や社縁ではなく、時には出自集団を越えた選択縁によって参集し、まさに「身体を介した経験」によって結びつけられている。これらの共通点は、ブラジルの日系エスニックイベントを対象とした民俗学的なアプローチの可能性をうかがわせている。

## 5-2. ロンドリーナの新旧盆踊り

パラナ州は、サンパウロ州の南隣に位置し、戦前から多くの日系人が入植し土地を開拓してきた。同州北部には、ロンドリーナ (Londrina 人口約 50 万)、マリंगा (Maringá 人口約 30 万) という中核都市があり、さまざまな日系イベントが開催されている。たとえば、ロンドリーナでは、毎年 9 月に「ロンドリーナ祭り」が行なわれる。2003 年から始まったイベントで、二世・三世を主体とする「グルーポ・サンセイ」(Grupo Sansey) が主催する。筆者が観察した 2007 年には第 5 回を迎え、9 月 5 日から 9 日まで 4 日間、市内のニシノミヤ公園で開催された。1 万 9000 平方メートルの会場には、日本食、飲み物、民芸品を売る屋台が約 50 軒並び、総計で約 10 万人の観客が訪れたという。特設舞台ではカラオケショーや太鼓、エイサー、沖縄伝統舞踊、YOSAKOI SORAN、健康体操、小中学校の子どもたちの合唱などが披露され、この年の試みとして流しそうめんが人気を集めた。このイベントの特徴は、毎夜「<sup>ボンオドリ・トラディショナル</sup>伝統的盆踊り」と呼ばれる旧盆踊りが主として一世世代によって、この地で創出された新しい盆踊り「マツリダンス」が二、三世と非日系人によって踊られている点である。

マツリダンスは 15 年ほど前に、<sup>ボンオドリ・ノーヴオ</sup>「新しい盆踊り」としてこの地方で始まったもので、盆踊りを基礎にポップスやストリートダンスの動きも取り入れた振り付けで日本のポップミュージックを踊る。ロンドリーナ祭り最大の呼び物として、期間中毎晩、旧盆踊りの後に踊られている。日本のポップスといっても、「松本ぼんぼん」「島唄」「ギザギザハートの子守唄」「ランナー」「PEACH」など、ジャンルもテンポも異なる曲をアレンジしているのが特徴だ。バンダ・グルーポ・サンセイによる生演奏をバックに、特設舞台の男女 2 組の日系トリオが交互に歌い、やはり日系の踊り手のリードに合わせて、観客が踊り狂う。ロンドリーナでは、10 年ほど前からその創作主体



であるグルーポ・サンセイが始め、同市の若者を中心に徐々に広まっていったという。最近では各地の他のイベントにも招待されるようになり、南米最大の都市サンパウロにも進出している。

ロンドリーナ祭りのもう1つの興味深い点は、一世に対するカウンターカルチャーとして、二、三世によって企画・運営されている点である。グルーポ・サンセイのリーダー、ミチコ城間さんは、1988年当時カラオケ教室を開いていたが、日本の歌を日本のメロディーに合わせて歌うことに今一つ物足りなさを感じていた。この年はブラジル日本移民80周年であり、各地で祝賀イベントが企画されていた。もちろん日系人の多いロンドリーナでも多くのイベントが企画されていたが、この頃日本人会の役員ほとんどが一世。彼らのイニシアティブのもとに企画が進められ、ミチコさんのようなブラジル生まれの若い世代の意見はなかなか取り上げてもらえなかった。彼女たちは一世がリードする当時の80周年祭のあり方に疑問を感じ、不満をつのらせた。そんな状況の中で生まれたのがグルーポ・サンセイである。ミチコさんは、「日本人というアイデンティティはあるけれど、一世とは違う主張をしたかった」という。また、「このロンドリーナマツリをやることで私たちが日本文化を伝承し、おじいちゃん、おばあちゃんたちが植えてくれた苗がちゃんと育っているということを伝えたい。そして、私たちの文化を非日系のブラジル人たちにも紹介し、新しいブラジル文化を創造していきたい」と語った。グルーポ・サンセイは新しい世代を意味する「三世」と肯定を意味する「賛成」をひっかけた言葉だという。

このように、新旧2つの盆踊りから、日系文化表象の世代間の分化や対立だけでなく、新しい文化が再創される可能性を見ることができる。2007年のマツリダンスの新しい振り付けは、仕事の関係でブラジル南部のリオ・グランデ・ド・スール州に居住するようになった振付師が、ケータイのビデオ機能で新しい振り付けを撮影し、ロンドリーナにいるメンバーにメール送信したものだということ。まさに、福間[2004]のいう電承のあり方が顕在化していることが興味深い。グローバル化とITの発達は、このような電子メディアによる文化の新しい伝承・伝播の可能性を生み出している<sup>(13)</sup>。

## 6. おわりに

2007年のロンドリーナ祭りで太鼓を叩いていた日伯混血の女の子は、「(マツリダンスは)ブラジル人と日本人がほどよく混ざり合っていて、まるで私みたい」とうれしそうに語った。ブラジルの日系文化の特徴は、その混濁性<sup>ハイブリディティ</sup>にもある。東洋祭りやロンドリーナ祭りは、日系コミュニティと深く関わりながらも、ホスト社会であるブラジルや他のエスニック集団の多様な文化がダイナミックに交差する混濁的なイベントとして発展していく可能性を内包している。

このように、ブラジルの日本文化／日系文化は、多様な文化と交差・混濁しながら、再創をくり返し、ブラジル文化を構成する1要素としても認知されつつある。したがって、ブラジルの日系文化を対象とする時、それは同時にブラジル文化でもあるという両義性についても留意する必要がある<sup>(14)</sup>。このように考えると、民俗学は、日系文化を分析するさまざまな概念や枠組みを提供するとともに、それを対象とすることで、その学としての可能性を広げることにもなる<sup>(15)</sup>。

くりかえすが、日本人の海外移住は日本の近現代史を構成する重要な一部である。かつて柳田国男が「国史と民俗学」[1935]で、文献史料一辺倒の歴史叙述を批判し、民俗資料で日本史を書きかえる必要があることを主張したことはよく知られている。ならば、日系社会をめぐる民俗

資料によって、日本の近現代史を書きかえることの可能性も議論されてよいはずである。ブラジル日本移民 70 年記念シンポにおいて、梅棹忠夫はブラジルへの日本移民を「われら日本人、新世界に参加す」と表現した<sup>(16)</sup>。ブラジル日系社会研究者の端くれとして、また 1 人の移民として、調査・研究のノウハウや経験、そして何よりも情熱を持ったより多くの民俗学徒の新世界ブラジルへの来訪、すなわち日本民俗学の新世界への参加を心よりお待ち申し上げる。

## 註

- (1) 「再創」とは、山田 [2002] によると、「すでにあるものを寄せ集めて、コピーし、あらたに何かを付け加えて創造すること」[14] であり、「コミュニティで情報を共有し、先人のまねをして共に栄えることが再創主義である」[214] として、文化の再創を積極的に評価している。
- (2) サンパウロ東洋街の形成については、根川 [1998]、NEGAWA [2001] などを参照。
- (3) たとえば、サンパウロ州のサン・ジョゼ・ドス・カンポス民俗博物館（O Museu do Folclore de São José dos Campos）。
- (4) ただ、マリオ・デ・アンドラーデの小説作品 *Amor, Verbo Intransitivo*（愛、変わることはない言葉）（1927）という作品には、タナカというハウスボーイが登場し、日本人移民の子どもで、成り上がり者として描かれている。
- (5) 中野 [2006] は、「イベントを広く捉え、「宗教とのかかわりを持たないマツリ」としておきたい」とゆるやかに定義している [219]。また、「神事を中心とした祭祀を「祭り」、神事に風流が付随し見物人が存在するものを「祭礼」、風流によって構成されるものを「マツリ」と表記し、「マツリとイベントは同義語として使っている」と整理している [238, 注 2]。
- (6) 電子メディアによって民俗事象が伝承・受容されることを表した福間自身の造語 [福間 2004: 222, 注 11]。
- (7) これらの議論については、小嶋 [2007] や細川 [2008] という形で発展させられている。
- (8) 根川 [2006] および同 [2008] では、これらの日系エスニックイベントを、「ゲストであるエスニック・グループの母集団の「伝統」に準拠、あるいはその一部を取り入れながら新たに再編・創出され、ホスト社会側にも認知された行事」として、「新伝統行事」と呼んでいる。
- (9) ただ、ここ数年のプログラムには、ずっと主催者であった宮城県人会が「Realização」（＝実施）と記載され、後援者の ACAL が「Promoção」（＝主催）となっている。県人会と ACAL の間で微妙な主導権争いがあることをうかがわせる。
- (10) 1958 年にサンパウロの東本願寺別院で開始され、1976 年に会場を東洋街のリベルダーデ広場に移している。
- (11) リベルダーデ地区を中心とする商工業・サービス業者の親睦団体。
- (12) 成功祈願祭には、柳田が「祭り」の構成要素とした神事としての「神態」、神酒や初穂などの「神供」 [柳田 1962] はあるものの、この「神事」は白昼の東洋街のメインストリートであるガルヴァン・ブエノ通りという日常的空間で行われ、当然、神の降臨の場所である「神地」や「神屋」を持たず、日本の農事暦での「祭日」とも切り離されているため、宗教性はきわめて希薄である。
- (13) 日本の YOSAKOI ソーランを再創した YOSAKOI SORAN も、その普及にビデオテープを介した模倣があったことを渡会 [2006]、同 [2008] が明らかにしている。
- (14) ブラジルの「日本文化」表象は、90 年代後半以降、日系コミュニティにおける一、二世から三世への世代交代や多文化主義的言説によって、長らく定説化していた「日本の日本文化」＝「真正な」日本文化という言説の呪縛からようやく自由になりつつある。最近ブラジルでは、「日系文化」や「新

日系文化」という言葉が使われ始めた。この言葉は、「日本文化をベースにブラジル風にアレンジした文化」という意味で使われているが、「日本の日本文化」から自らの「日本文化」を「日系文化」として自覚的に差異化し、多文化的な「ブラジル文化」を構成する一要素として位置付ける姿勢を示している[根川 2009: 72-73]。

- (15) 森 [2000] は、岩本 [1998] の「[民俗]をではなく「民俗」で」[26]という視点をふまえ、「こうした立場に立つことによって、民俗学は「一国民俗学」という枠組みを超え、エスニック民俗学という新たな領域を生成する可能性をもっている」と指摘している。
- (16) 「ブラジル日本移民 70 周年祭」記念事業の一つとして 1978 年にサンパウロで開催された「日伯新時代と国際シンポジウム」における基調講演での梅棹忠夫(当時国立民族学博物館館長)の言葉「われら日本人、新世界に参加す」に拠る。

## 文献

- 阿南 透・内田忠賢・才津祐美子・矢島妙子 2000「祭りの「旅」－「ねぶた」と「よさこい」の遠征・模倣・移植－『旅の文化研究所研究報告』9
- 阿南 透 2003「現代の祭りと神の不在」赤坂憲雄・中村生雄・原田信男・三浦祐之編『神々のいる風景』岩波書店
- 阿南 透 2008「祭りの海外遠征－ロサンゼルス青森ねぶた－」『江戸川大学紀要・情報と社会』18
- 岩本通弥 1998「[民俗]を対象とするから民俗学なのか－なぜ民俗学は「近代」を扱えなくなってしまうのか－」『日本民俗学』215
- 内田忠賢 1999「都市の新しい祭りと民俗学－高知の「よさこい祭り」を手掛かりに－」『日本民俗学』220号
- 小嶋 茂 1999「ブラジル日系社会における芸能の伝承と変容」上智大学イベロアメリカ研究所『イベロアメリカ研究』XXI(1)
- 小嶋 茂 2007「ブラジル、パラナ芸能祭にみる文化の伝承－日系コミュニティの将来とマツリ、そしてニッケイ・アイデンティティ－」山本岩夫・ウェルズ恵子・赤城妙子編『南北アメリカの日系文化』人文書院
- 鳥越皓之 1988『沖縄ハワイ移民一世の記録』中央公論社
- 中野紀和 2003「民俗学におけるライフストーリーの課題と意義－祭礼研究との関連から－」『日本民俗学』234
- 中野紀和 2006「[移動]から捉えたイベントと祭礼のイベント化」『日本民俗学』247
- 根川幸男 1998「サンパウロ東洋街の形成と変容」Anais do IX ENPULLCJ. Assis, Unesp
- 根川幸男 2006「マルチエスニック都市サンパウロにおける「日本文化」の表象」住田育法編『平成16～17年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書・現代ブラジルにおける都市問題と政治の役割』
- 根川幸男 2008「ブラジルにおけるエスニック日系新伝統行事の創出－七夕祭りの再創と展開を中心に－」『移民研究年報』14
- 根川幸男 2009「ブラジル近現代史における「日本文化」表象」白幡洋三郎・劉建輝編『日本文化研究の過去・現在・未来－新たな地平を開くために－』報告書』国際日本文化研究センター
- 芳賀日出男 2006「外国から見た日本の祭り」星野紘・芳賀日出男監修『日本の祭り文化辞典』東京書籍
- 福田アジオ・湯川洋司・中込睦子・新谷尚紀・神田より子・渡辺欣雄編 1999『日本民俗大辞典上』

吉川弘文館

福田アジオ・湯川洋司・中込睦子・新谷尚紀・神田より子・渡辺欣雄編 2000『日本民俗大辞典下』

吉川弘文館

福岡裕爾 2004「「ウツス」ということー北海道芦別健夏山笠の博多祇園山笠受容の過程」『国立歴史民俗学博物館研究報告』114

細川周平 1995『サンバの国に演歌は流れる』中央公論社

細川周平 2008『遠きにありてつくるものー日系ブラジル人の思い・ことば・芸能』みすず書房

前山 隆 2003『個人とエスニシティの文化人類学ー理論を目指しながらー』御茶の水書房

宮田 登 1986a「日系移民の“くに”意識」谷川健一他編『日本民俗文化大系 12 現代と民俗ー伝統の変容と再生ー』小学館

宮田 登 1986b「移民と民俗文化」『現代民俗論の課題』未来社

宮田 登 1989「日系移民の民俗文化」綾部恒雄編『カナダ民族文化の研究ー多文化主義とエスニシティー』刀水書房

宮本常一 1960『忘れられた日本人』未来社

茂木 栄 1989「都市とイベントー新しいマツリの形式の抬頭」岩本道弥・倉石忠彦・小林忠雄編『都市民俗学へのいざないⅡ 情念と宇宙』有斐閣

森 幸一 1995「食文化を通してみた日伯交流史序論」水野一監修・日本ブラジル交流史編集委員会編『日本ブラジル交流史ー日伯関係 100 年の回顧と展望ー』日本ブラジル修好 100 周年記念事業組織委員会

森 幸一 2000「「創造される」民俗文化ー移民への視点ー」香月洋一郎・赤田光男編『講座日本の民俗学 10 民俗研究の課題』雄山閣

柳田国男 1925「移民の移民論（一）～（完）」『植民』4(3~8)（『柳田国男全集』26 巻、筑摩書房、2000 に再録）

柳田国男 1962「日本の祭」『定本柳田国男集 10』筑摩書房

柳田国男 1963「国史と民俗学」『定本柳田国男集 24』筑摩書房

柳田国男 1970「明治大正史世相篇」『定本柳田国男集 29』筑摩書房

山田奨治 2002『日本文化の模倣と創造ーオリジナリティとは何かー』角川書店

渡会 環 2006「「YOSAKOI ソーラン」から「YOSAKOI SORAN」へー日本の現代的都市祝祭のブラジルへの伝播と変容ー」『Encontros Lusófonos』8

渡会 環 2008「日本の「マツリ」を持ち込んだ日系ブラジル人ー多文化社会に生きる自己の新たな表現手段としてー」『ラテンアメリカ・カリブ研究』15

ABLEU, Joana Cavalcanti. Entre Os Símbolos e A Vida: Poesia, Educação e Folclore. <<http://www.historiaecultura.pro.br/modernosdescobrimientos/desc/meireles/entreosimboloseavida.htm>>[Last Access: 2009/02/07].

ACAL. 1996. Liberdade. São Paulo, ACAL.

ANDRADE, Mario de. 2006. *Amor, Verbo Intransitivo*. 16th ed. Belo Horizonte-Rio de Janeiro, Vila Rica.

BENJAMIN, Roberto Emerson Câmara. 1992. “A Pesquisa de Folclore na Universidade”. In. *Simpósio Nacional de Ensino e Pesquisa de Folclore Anais*. São José dos Campos, Fundação Cultural “Cassiano Ricardo”/ Comissão Nacional de Folclore/ IBCEC/ UNESCO/ Comissão Municipal Setral de Folclore.

CASCUDO, Luiz da Câmara. 1969. *Dicionário do Folclore Brasileiro*. Rio de Janeiro, Ed. Tecnoprint.

NEGAWA, Sachio. 2001. “Um Comerciante Japonês: História de Vida no Bairro Oriental de São Paulo”. In. *Estudos Japoneses* 21. São Paulo, FFLCH/USP.

ROMERO, Sílvio. 1954. *Contos Populares do Brasil*. Rio de Janeiro, José Olympio（初版は Lisboa, Nova Lisboa Internacional Editora 発行の 1885 年版）.

TONI, Flavia Camargo（発行年不詳）“A Missão de Pesquisas Folclóricas”. In. *Cantos Populares do Brasil: A Missão de Mário de Andrade*. São Paulo, Centro Cultural São Paulo.

“Na Liberdade, Música e Dança podem Bênçãos”. *Jornal da Tarde*. 2001/12/9.